第３号

令和５年７月25日発行

北海道立旭川子ども
総合療育センター
〒071-8142
旭川市春光台
２条１丁目1-43
TEL：0166-51-2126
FAX：0166-51-2127
https://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/asc/index.html

ポストコロナを迎えるにあたって

北海道立旭川子ども総合療育センター
院長　田中　肇

はじめに

青空に日ごと暑さも加わり夏のさわやかさを感じられる季節となって参りましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。本年五月八日より新型コロナ感染症が感染症法上五類感染症に移行しました。これにより世の中が徐々にいわゆる「コロナ前」に戻りつつあり、それに伴い子ども達のはじけるような笑顔も増えて来たように思います。そして何より今我々は長い間失われていた「普通の日々」の大切さを再認識することができている、このことこそが明日に向かい進んで行く我々にとって一番大きな財産なのではないかと感じております。

自分を変える

ここ最近は大変な事も多く気持ちが沈みがちだったので、前向きになれそうなタイトルに惹かれて田口久人さんの『きっと明日はいい日になる』という本を読んでみました。短く綴られた言葉は心に響くものばかりであり、今でも気に入った箇所を繰り返し開いては目を通しています。

その中で二つほどご紹介を

『たとえ今日がどんなに苦しい日でも、明日笑えるかは自分次第』。自分の気持ちを暗くしているのは他ならぬ自分自身。今日がどんなに辛くても、自分を明るく変えようと挑戦できる「明日」は誰にも平等に訪れます。もう一つは人間関係に関し書かれた一節の冒頭文です。『苦手な人がいるのではなく、苦手と思う自分がいるだけ』。これは目から鱗でした。主体は自分なのですね。苦手と思っているのも避けているのも自分、だから結局いつまでも何も変わらない。この二つの言葉はまさに「過去と他人は変えられないけれども、未来と自分は変えられる」というエリック・バーン医師の名言に重なります。昨日までの辛いことを人のせいと考えている間はきっといつまでも幸せにはなれません。まずは自分を変えて明日を笑顔で過ごすこと、これは誰がどうあろうと自分の気持ちだけでできるはずだということですね。心の中に明るい未来を描くための貴重な示唆を与えてくれた、一冊の本との出会いでした。

断捨離の極意

話は大きく変わりますが、皆さんはもちろん断捨離という言葉をご存知だと思います。以前テレビか何かで、その断捨離の極意を語っていた達人がおられました。その方はまず整理する物を直感的に三つの箱に分けるそうです。絶対に必要な物、絶対に必要のない物、そしてどちらとも言えず迷う物の三つです。この三番目は「絶対に必要というわけではないけれど、もしかしたら後で必要になるかもしれないのでとりあえずとっておく」というニュアンスなので、おそらくここに入れられる物が最も多いことでしょう。そしてその達人は、そうして分

けたうちの二番目と三番目の箱の中のものを迷わず捨てるのだそうです。なるほどこれだと直感的に絶対必要と思った物以外は全て捨てることになるので、結果としてかなりのものが捨てられそうです。素晴らしいアイデイア、そしてこれはかなり他のことにも応用できる考え方なのではないかと思いました。

例えば車の運転。すぐ目の先に信号付きの交差点がある。余裕で青のまま行けそうか、全く間に合いそうにないか、ギリギリで黄色になりそうな微妙なタイミングか。三つに分けて後の二つは迷わず止まる。分かりやすいですよね。では療育では何か生かせるしょうか。子どもの行いで良くない行為、とても立派な良い行為、そして普通の行為。このうち後の二つは褒める。特別良い行為ではなくても普通のことを普通にできた時には褒めましょうと外来でよくお母さん達にお話しますが、行為を三つに分けて真ん中の普通の行為も褒める、という方がより明確なので褒める場面が増えるかもしれません。「シンプルに整理してわかりやすく伝える」という仕事の本質に結びつくようなヒントは、あらゆる所に転がっているものです。

終わりに～ポストコロナと多様性～

これまで私は機会あるごとに新型コロナの心への影響について書いてきました。今ようやくコロナの影響が弱まり、世の中にコロナ前の賑やかな毎日が戻りつつあります。しかし一方でマスクをしているおかげで安心して学校に行けているというお子さんもいるかもしれません。感染を気にしなくなった世の中が怖いと感じる感受性の高い子もいるでしょう。今は人の多様性がとても尊重される世の中になってきました。しかし「多様性を認める」ということは「多様性のある人々を全て皆と同等に扱う」というような上から目線の考え方では決してありません。多様性があるからこそそれぞれの個性を理解し、認め合い、できる限りの配慮の中でお互いの幸せを守り合うということです。コロナ禍となっていった変化と同様にコロナ禍からコロナ前に戻ることもまた大きな変化であり、そこは誰もが容易に適応できる場所とは限りません。

ポストコロナを迎える私達は、人々の多様性というものをもう一度理解し直す良い機会を与えられているのかもしれません。

新任・昇任職員紹介

令和五年四月一日付及び六月一日付で就任した皆さんからの挨拶です

事務長
（兼地域連携室副室長）
橋本　淳

この度、四月一日の人事異動で事務長となりました、橋本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、これまで、保健・医療・福祉の分野で主に勤務しており、福祉施設を指導する部署や病院での勤務経験はありますが、福祉施設で勤務するのは初めてとなります。

当センターは、医療型障害児入所施設として、入院による医療を必要とする障がいのある児童に対して、保護、日常生活の指導、知識技能の付与及び治療を行っているほか、地域の子どもたちの健やかな成長を支えるために、様々な療育サービスや相談支援も提供しております。

今回の異動を機に、医療型障害児入所施設の運営について再度学び直し、道東、道北の療育の拠点として、障がいのある児童とその家族の幸せのため、児童と家族のニーズに応えられるよう努めてまいりますので、皆様のご支援ご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

理学療法室収納庫扉のカピバラ

庶務課職員
課長　渡邉　千夏子

六月に滝川保健所から異動して来ました。旭川市には、父親の転勤で、小学生のとき二年間住んでいました。学校の写生会で旭山動物園のだちょうを描いたことを覚えています。

そのころ、年の離れた妹が生まれました。次の転勤先で一歳になりましたが、歩き始めることができませんでした。夜中にひきつけを起こして救急搬送されたり、だんだん重度の障がいがあることがわかりました。その時代なりの療育を受けたと思います。

障がいのあるきょうだいがいることで、家族として疲弊することも、また、強い絆を感じることもありました。いまは会うことができませんが、センターに来てからいろいろと懐かしく思い出しています。

センターを利用する子どもさんとご家族に心の中でエールを送りつつ、裏方としてセンターの適切な運営に努めてまいりますので、よろしくお願いします。

庶務係
主事　石崎　彪雅

四月から異動してきました、石崎と申します。

三月までは、倶知安町にある後志総合振興局の水産課で勤務していて、漁港の管理・魚が生活しやすい環境を作る工事や、漁業の調整をする業務を行っていました。

今の業務とは真逆の外業が主となるので、月によっては毎日のように外勤に出ていて、遠いところは二時間かけて行くこともありました。

漁師さんや地元の方とお話出来る機会が沢山あり、一次産業に関わる仕事が出来て面白い職場でした。

後志ではキャンプ、ドライブやスキー、柔道などをしていました。異動してきてからはあまり出来ていないので、オススメのキャンプ場などがあれば教えてくれるとうれしいです。

事務職採用ではあるのですが、今までの六年間は技術職の人が行う様な業務しか携わっていなかったので、今の業務が務まるか不安ですが、陰ながら皆さんの役に立てるようにコツコツ頑張っていければとおもいますので、これからよろしくお願いします！

医療課職員
課長　福田　郁江

今年四月より医療課長になりました小児科医師の福田郁江です。

医療課長とは様々な連絡事項を速やかに医療課のメンバー(小児科医師　整形外科医師　歯科医師　薬局　検査科　放射線科　栄養科　心理判定員)に伝達し調整することが主な仕事と考えております。

医療課のメンバーが共通の認識を持ち、患者様により良いサービスを提供できるように一致団結して対応していきたいと思います。

新型コロナウィルス感染症も二類から五類になり、今まで控えていた雑談を増やして風通りのよい医療課になるように務めていく所存です。

医長　芳賀　俊介

本年四月より旭川子ども総合療育

センターで勤務することになりました芳賀俊介と申します。医師としては今で七年目となり、これまで旭川や富良野、遠軽などの小児科で急性期疾患の診療を主に行ってまいりました。このたび慢性疾患や神経発達症などのお子さんの診療を専門とする当センターで働くことになり、期待に胸が膨らんでいます。

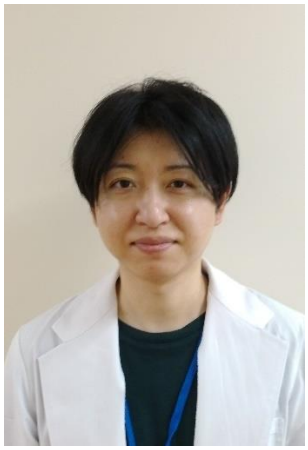
おかげさまで、働き始めてまだ間もないですが、関わらせていただいたお子さんやそのご家族、そしてセンター職員の皆様とも少しずつですが打ち解けているように感じております。

小児科医として、この施設において肝に銘じたいことがあります。アメリカ小児科学会によれば、「小児科医は子どもの代弁者」でなければならないとされています。私がこの施設で特に強調したい理由は、この施設のお子さんたちは様々な理由で自分たちの気持ちを伝えることが難しいからです。子どもの代弁者としてどのようにすれば良いのか、慶應大学医学部小児科教授である高橋孝雄先生は、子どもの行動や表情に常に目を配ることが重要であると述べています。また私は、元解剖学者であり「バカの壁」などで著名な養老孟司さんの著作をよく読むのですが、その中でいつも心に響く一つのポイントがあります。「情報処理ではなく、情報化できるようにならねばならない」という点です。情報処理は、すでに存在する情報を効率的に処理することですが、情報化とは、自分の五感で感じたものを言葉や他の形で表現し、他の人に伝えることです。もちろん、センターのスタッフの皆様が情報化されていることには十分に信頼を置きつつ、私自身もその情報に甘んじず、情報化に努めていきます。

藤岡弘さんの「藤岡弘、の三分散歩」を手本に、五感をフル活用して取り組んでいきたいと考えています。

日々感謝の気持ちを持ちながら、スタッフの皆さまが心地よく働ける環境を作りながら、センター利用者の皆さまに少しでもお役に立てるよう努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

管理栄養士　沢口　昌廷



初めまして。管理栄養士の沢口昌廷(さわぐち　まさたか)と申します。この度、旭川子ども総合療育センター医療課に配属となりました。出身は秋田県です。

センターに来る前まで釧路保健所に勤務し、栄養業務や受動喫煙対策、コロナ対応と幅広く業務をこなしていました。

今回の異動でこれまでの業務とはまた違う分野となり、センター並びに委託給食会社の職員の皆様に支えてもらいながら日々、業務に取り組んでおります。至らない点が多々あると思いますが、センターにいる子どもたちに少しでも笑顔になっていただけるようおいしい給食の提供、栄養管理等に努めて参りますので、何卒よろしくお願いします。

判定員　井上　花梨

四月より旭川子ども総合療育センターで勤務することになりました、判定員の井上花梨です。

私は社会人一年目で、旭川に住むことも初めてなので、大変なこともありますが毎日楽しく過ごしています。

今まで子どもと接する機会が少なかったので、旭川子ども総合療育センターで勤務となり、様々な子どもたちと関わる機会が増えてとても嬉しいです。

今はまだ発達検査について勉強することばかりですが、早く他の判定員の方々のようになれるよう精一杯頑張ります。まだまだ慣れないこともありますが、より多くの子どもた

ちと関わりながら成長していけたらいいなと思っています。これからよろしくお願いします。

地域連携課職員
課　長　長谷川　信幸

本年四月一日付けで留萌保健所天塩支所から異動して参りました、地域連携課長の長谷川と申します。

旭川子ども総合療育センターの勤務は二度目となりますが、地域連携課の仕事は初めてで、毎日右往左往しながらも楽しく働かせていただいております。

当センターを利用される子どもたちやご家族の方々が安心して過ごすことができるよう微力ではありますが尽力してまいりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

生活支援係
係長　土田　明子

みなさんはじめまして。

四月から地域連携課生活支援係長として勤務することになりました土田明子です。

『道職員人生のどこかで旭川子ども総合療育センターに勤務できたらいいなぁ～…』と希望していた経過もあり、今回このようなご縁をいただけたことを嬉しく思っています。

さて、私の前任は北海道旭川児童相談所で、その前は北海道立向陽学院（児童自立支援施設）でした。その他の勤務経験も含めると福祉に関連する勤務経験は積み重ねてきていますが、所かわって旭川子ども総合療育センターとなると…、今のところは毎日が“新たに教わること”、“子どもたちから学ぶこと”の連続です。

しばらくは不慣れな点も多く、周囲から見て頼りない姿の連続だとは思いますが、早くここでの生活に慣れて、センターの一員としてお役に立てれば…と思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

地域支援係
判定員　皆川　友里

四月に函館児童相談所から異動してきました判定員の皆川友里と申します。

業務内容は、子どもたちの心理検査を行ったり、地域連携課職員として、道立施設専門支援事業や秋に行われる地域支援セミナーの運営事務を担当しています。

ここには様々な専門職が勤務しています。それぞれの専門的な視点や考えを共有することができるので、自分の知識や経験だけでは気づくことができなかった新たな発見や気づきがあり、知識や経験の引き出しが日々増えていくような、そんな有意義な毎日を過ごしています。

まだまだ慣れないことばかりで至らない点もあるかと思いますが、早くこの環境・仕事に慣れて、戦力になれるよう頑張りたいです。よろしくお願いいたします。

1階廊下のリス

看護職員
副総看護師長
（兼地域連携室副室長）
明井　美香

北海道もいよいよ本格的な夏の暑さを感じる頃となりましたが、みなさま夏バテなどせず元気にお過ごしでしょうか。今年、四月より新たな役割をいただき、生活棟から看護部に異動となりました。保護者のみなさまや関係者の方々に声をかけていただくたびに、自分の責任の重さを実感している毎日です。

昨年より看護部門では「子どもとご家族（養育者）の幸せな生活に向けた継続的な支援」を目標とし、タイムリーな情報の共有のもと部署間連携を図り、地域の医療・福祉・教育・保育機関とネットワークを形成しながら、子どもたちひとり一人にあわせた療育支援を強化していきたいと考えております。

五月よりコロナが五類相当となりましたが、院内では安心・安全ある療育環境を整えるため独自の感染予防対策を実施しております。引き続きご理解とご協力をよろしくお願い致します。

生活棟
副看護師長　高原康子

この四月から当センター生活棟の副師長を務めさせていただいています。当センターに勤めて、旧一病棟、一般病棟（現生活棟）、親子棟の勤務を経て、昨年古巣の生活棟に戻って来ました。以前働いていた病棟であり、助勤でも来ていたところとは言え、様々な不安もありましたが、周りのスタッフや子どもたちに支えてもらいながらこの一年楽しくお仕事させていただきました。

しかし一方では、以前の記憶も乏しくなるとともに、ワーキングメモリーのキャパも少なく、教えていただいたことをすぐに忘れてしまったり、同じことを何度も聞いたり…という場面も多くあり、まだまだわからないことだらけで、皆様にもご迷惑をかけっぱなしの一年でした。

そのような私が、このたびの辞令で副師長を務めることになるとは…と二ヶ月経った今も多々感じる場面がありますが、皆様に今後も助けていただきながら、少しでも自分なりに成長でき、そしてセンターの子どもたちやスタッフの皆様の役に立つことができればと思っています。

子どもたちに少しでも良い環境を提供していくために、多職種の方々と連携し、より一層風通良い環境作りに貢献していきたいと思っていますので、今後も引き続き支えていただければと思います。

看護師　土門　由香

四月より入職致しました生活棟看護師の土門由香と申します。今まで、内科や泌尿器科で成人看護の経験を積んできましたが、子どもの療育という新たな分野でスキルを身に付け、看護師としてさらに成長したいという思いが強くなり志望致しました。

子どもに関わる仕事は初めてであり、緊張や不安もありますが、子どもたちの声や笑顔に活力を頂き、また、職員の皆様にご助言を頂き、日々新鮮な気持ちで取り組めることに感謝しております。

子どもたちやご家族に寄り添うこと、安心して過ごせる生活環境を整

えることを目標に、多職種との連携や個別性を大切にし、看護師として取り組んでいきたいと思います。

不慣れな点が多く、ご迷惑をおかけしますが、一日でも早く、子どもたちやご家族、職員の皆様に信頼して頂けるよう、一生懸命努力していきたいと思います。今後ともよろしくお願い致します。

親子棟

看護師長　松本　工

本年四月一日、親子棟看護師長に就任しました、松本工です。

平成一九年から療育センターで勤務し、今年度で一七年目となります。親子棟での勤務は九年目となり、気がつけば親子棟で一番の古株になっていました。

私が親子棟に配属になった時は、一般親子入院に毎回十組前後は利用され、とても賑やかで熱気のある入院だった印象を持っています。現在は少しずつ一般親子入院の利用者数は減少し、逆に神経発達症の短期入院の需要が伸び、親子棟利用者のニーズの変化を感じております。

今年度は神経発達症の短期入院を大幅に増やし九回／年度を予定しております。

また五月からは新型コロナウイルスの対策が段階的に緩和され、今まで来られなかったご家族や関係機関の方々も親子棟内に入り、リハビリ見学や診察等の参加の機会も増えてくると期待しています。

今後も利用される方々のニーズに応えられるよう看護師のみならず多職種や地域との連携を図り、利用される親子に必要な療育支援ができる病棟を築いていきたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

副看護師長　神　澄江

八年ぶりに戻って来ました親子棟！

今年四月から副看護師長となり生活棟から親子棟へ異動になりました神澄江と申します。

親子棟といえば・・・コロコロ♪リーリー♫虫の音が聞こえ・・あれっ？ずいぶん近くで聞こえる？と思ったら廊下でコオロギが鳴いていたり、ナースコールが鳴り行ってみると、カメムシが部屋にいて、腰が引けながらガムテープで退治したり、リハビリ室の棚に並んでいた大きな人形に夜の巡回の度に驚かされ、目が合わないようにしていた日々が思い出されます。

今は、新センターとなり、虫に驚かされることはありませんが、何か楽しいことが起きるのではないかと期待しています。

センターに入職して二十年目。

結婚、出産、子育てとセンターの子どもたちと一緒に成長させていただいております。

今年は、バージョンアップしている親子棟でご家族の気持ちに寄り添い、ご家族、お子さまのいい顔、スタッフのいい顔に出会えるよう、日々努力してまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

CT 室扉のパンダ

シン連載エッセイ

よつばの庭

宇佐見　早知

「それ」

「それ」と出会ったのは、新センターが開設して少し経った頃だった。「それ」はセンターから学校へ向かう途中にあり、子どもたちの送迎時に、なぜか必ず目に入るものだった。

晴れの日も雨の日も、風の日も、飛んでしまいそうな「それ」はただそこにあった。気付けば毎日「それ」を確認するようになっていた。

ある朝いつもと違う様子に驚いた。蝶がゆっくりと出てきていたのだ。

そう、私が見ていたのは蛹（さなぎ）、羽化する瞬間だった。そうか、ただの枯れ葉かと思ったそれは、命そのもの。だからあんなにも心を惹かれたのか…。

療育も少し似たような面がある。いつまでも同じことをして変わりが無いような動きや行動でも、実は中身をよく見てみると少しずつ変化していて、いつかビックリするようなことが出来たりするもの。

同じようなことを繰り返している時間そのものが、次のステップに繋がる大切な時間で、そこを大切に見てもらいたい。

蛹から出てきた蝶の羽はとても透明で、か弱い存在に思えた。しかしそれも数分。次に見たときには、蛹を残して羽ばたいていた。

そうか、次のステージに旅立ったんだな。大切なことを教えてくれてありがとう。

「しあわせ」

ある日家に帰ると、両手いっぱいの四つ葉が水に浸かって玄関に置いてあった。「今日庭の草刈りしたからその前に四つ葉とったんだ！」と息子が教えてくれた。

ざっと数えて…三十本？それぐらいありそう。三つ葉も混ざってるんじゃない？いや、よく見ると三つ葉どころか、四つ葉を先頭に五つ葉、六つ葉まである。もう呼び方すら分からないほどだ。庭に四つ葉がいっぱいあるのは知ってたが、これほどとは。しかもこんなにあると逆に何か有り難みが薄れると言うか…。

そんなことを思っているときに息子が「今度これ押し花にするんだ！」と元気に言った。

そうか、これは息子が、四つ葉がしあわせのシンボルだと知っていて、見つけるたびキレイに摘み取って、枯れないように水をあげて、いつまでも残るように押し花にすると、しあわせそうに笑顔で言う。

それでいいんだ。

うちの庭の四つ葉は、毎年色んなことを教えてくれるしあわせの四つ葉たちだ。

会の愛児だより

令和四年度の活動報告です

令和四年

四月
定期総会　中止
イオンの「幸せの黄色いレシートキャンペーン」登録

五月
賛助会員募集（百名）

六月
花壇の種・苗植え（マリーゴールド他）

七月
おやこまつり（助成）保護者参加

九月
第一回理事会　中止
前半の報告と後半の予定を配布

十月
花壇の花を片付け、チューリップの球根を植える。

十二月
会員の子ども達にクリスマスプレゼントの補助…令和五年度は増額予定

令和五年

一月

ボランティア活動への協力

・中川バイオリン教室コンサート

・第十八回雪像作り

（曹友会制作）

ちいかわ、ピカチュウ、アンパンマン、小だるま五個

二月

やまぶき会と合同でセンターとの対話集会は中止し、書面による質疑応答を実施

三月

第二回理事会　中止

会報「夢」発行

一月から十二月まで

○再生資源回収（古新聞・古雑誌・アルミ缶・スチール缶・段ボール等）

○ベルマーク回収（ベルマーク・テトラパック・使用済みインクカートリッジ）

○理髪料金受け払い業務

会員一回につき三百円の補助あり

○公衆電話管理業務

○自動販売機管理業務

今年度も愛児の会は神田飛鳥会長を中心に昨年同様に活動します。

また、正会員、賛助会員を募集中です。

ご協力をよろしくお願いします。

職員の動向

令和四年五月二日から
令和五年六月一日まで

退職

令和五年三月三十一日付け

事務長　角　直剛

医療課

医長　三島　令子

医長　岡野　聡美

地域連携課生活支援係

専門主任　志治　寿恵

親子棟

主任看護師　神原　君江

転出

令和五年四月一日付け

庶務課庶務係

主事　河合　まどか

（障がい者職業能力開発校へ）

地域連携課

地域連携課長　佐藤　憲昭

（旭川児童相談所子ども支援課児童福祉司へ）

生活支援係長　菊地　恵美

（旭川児童相談所子ども支援課主査へ）

地域支援係

福祉専門員　井須　早紀

（北見児童相談所へ）

令和五年六月一日付け

庶務課

庶務課長　若狭　真波

（空知総合振興局保健環境部社会福祉課へ）

会計係

主事　大西　雅樹

（保健福祉部地域医療推進局地域医療課へ）

新規採用

令和五年四月一日付け

医療課　医長　芳賀　俊介

医療課　判定員　井上　花梨

生活棟　看護師　土門　由香

転入

令和五年四月一日付け

事務長　橋本　淳

（保健福祉部地域福祉課課長補佐から）

庶務課庶務係

主事　石崎　彪雅

（後志総合振興局水産課から）

医療課

管理栄養士　沢口　昌廷

（釧路総合振興局保健行政室から）

地域連携課

地域連携課長　長谷川　信幸

（留萌振興局保健環境部天塩地域保健支所長から）

生活支援係長　土田　明子

（旭川児童相談所地域支援課児童福祉司から）

地域支援係

判定員　皆川　友里

（函館児童相談所から）

令和五年六月一日付け

庶務課

庶務課長　渡邉　千夏子

（空知総合振興局保健環境部滝川地域保健室企画総務課企画主幹から）

編集後記

「アサッコ」第三号をお読みいただきありがとうございます。

今回は職員の異動が多かったため、新任職員の紹介に多くの紙面をさかせていただきました。

自己紹介欄は写真を見ながら文章を読むと、職員の「優しさ」「真面目さ」「ユーモア度」が見えてくるような気がしませんか？

また、シン連載エッセイ「よつばの庭」もホッとする文章と大量？の四つ葉の写真を見ると運気が上がりそうです。

今後も、断捨離の極意を参考に「シンプルに整理してわかりやすく伝える」紙面作りを目指していきます。

【地域連携課担当】